ひょうご水百景

No.40　佐用川（佐用町平福）

～「雲突城」とも呼ばれた天空の城・利神城～

写真-1　天神橋から上流を撮影（平成26年10月）

■ 池田出羽守由之、佐用川を外堀として利神城を築く

上の写真- 1 は、佐用川に架かる天神橋から上流方向を撮ったもので、前方に見える橋は京橋で、その右手に見えるのが智頭急行の平福駅です。そして、駅の右手に聳える山の頂に小さく見える石垣が利神（りかん）城址です。京橋を左に行くと、国道 373 号沿いに道の駅「宿場町ひらふく」平福があります。宿場町であった平福ですが、元々城下町を起源としており、利神城址や山麓の御殿屋敷跡に残る石塁（石を積み上げて造った防御用の土手）がその歴史を今に伝えています。

写真-2　利神城址

南北朝期の貞和５（1349）年に赤松一族の別所敦範（あつのり）が利神山に山城を築いて以来、赤松一族の拠点としての役目を担ってきましたが、天正６（1578）年山中鹿之助に攻められて落城、慶長５（1600）年、関が原の戦のあと播磨 52 万石の領主となった池田輝政が、甥の池田出羽守由之（よしゆき）を平福領２万２千石（慶長６年の検地実施後２万３千３百石）の領主とします。由之は、輝政の兄・之助（ゆきすけ：天正 12 年小牧・長久手の戦いで父・恒興とともに戦死）の子であるにもかかわらず家老待遇であることに不満を持ち、ずいぶん放胆な政治を行い、奢りを極めた生活をしていたと言われています。

慶長 ５（1600）年の秋、佐用郡に入った由之は早速利神山上にあった赤松氏の砦を取り壊して、そこに領内の労働力を結集して広壮な城郭造営を開始します。三層の天守をはじめとして、二の丸・三の丸・鴉（からす）丸・大坂丸などの楼閣群を築き、これらを結ぶ回廊をめぐらします。山上にそびえる利神城の天守は、あたかも雲を衝くがごとき威容から「雲突城（くもつきじょう）」とも呼ばれました。

利神山の西麓を流れる佐用川とその左支川・庵（いおり）川を外堀として利用し、その内側に城主常屋敷、家臣屋敷を配し、外側の因幡街道沿いに町屋敷を配置するなど、城下町の建設を進めていきます。

５年の歳月をかけて利神城が落成、慶長 10（1605）年、池田輝政が利神城を見るために佐用郡に向います。因幡街道を東から下ってきた輝政は、釜須坂付近（現在の一般県道 547 号横坂下徳久線で中国道をくぐって約 500m 南下したあたりか。）まで来たとき、北方の山頂にそびえ立つ利神城の雄姿を目にします。しばらく無言で城を見つめていた輝政は、馬首をめぐらし引き返して千本宿に泊り、天守の破却を命じる書面を由之に送ったとの言い伝えが残されています。

代々平福の大庄屋を務め、18 世紀には旗本松平氏の代官として陣屋での政務を任されていた田住家に残る「田住家文書」の中に、「慶長 10 年の頃一国一城と定め天守破壊に相成る」との記載があります。しかし、「一国一城令※1」は慶長 20（1615）年発令なので、一国一城令によるものであれば天守破却は慶長 20 年以降となります。一方、慶長 10 年が正しいとすれば、一国一城令ではなく輝政の命令により破却したという前述の言い伝えが真実味を帯びてきます。

下の図は、慶安 3（1650）年に書かれた「利神城古図」ですが、この時には利神城はもちろんのこと、山麓の城主常屋敷等も取り壊されて無くなっています。

※1 一国一城令：大坂夏の陣直後の慶長 20 年閏６月 13 日（1615 年８月７日）に江戸幕府が制定した法令。徳川秀忠が発令したが、法令の立案者は大御所徳川家康。大名の軍事力を統制して徳川家による全国支配を強化することを目的としており、その内容は、一国に大名が居住あるいは政庁とする城郭はひとつとして、その他の城はすべて廃城にするというもの。これにより、安土桃山時代に 3,000 近くもあったといわれる城郭が、約 170 まで激減したとか。（もったいな！）

図-1　利神城古図

慶安 3（1650）年、当時の平福藩主・松平左近康朗の命により、家臣の都築四郎左衛門が書き残したもので、利神城の往時を偲ぶ唯一の貴重な史料である。

（『播磨国佐用郡平福 田住家文書翻刻資料集 第一集』から引用）

■ 播磨の”天空の城”利神城址

朝来市にある“日本のマチュピチュ”竹田城址は、遺構が完存する全国でもまれな山城遺跡で、虎が臥せているように見えることから「虎臥城（とらふすじょう）」とも呼ばれています。秋から冬にかけてのよく晴れた早朝に朝霧が発生することがあり、この雲海に浮かぶ竹田城址がいつからか「天空の城」とも呼ばれるようになりました。

では、平福の利神城址はどうでしょうか。残念ながら、石積があちらこちらで崩落していて、かなり荒廃が進んでいるので遺構の保存状態では竹田城址に及ばないものの、有名な「佐用の朝霧」に浮かぶ利神城址は、さしずめ“播磨の天空の城”ではないでしょうか。（朝が苦手な筆者は、残念ながら朝霧に浮かぶ竹田城址も利神城址も見ていません。）

ということで、利神城址と竹田城址の比較をしてみました（表-1）。「観光」という観点で見ると、竹田城址は、東にある「立雲峡」からの展望がすばらしく、雲海に浮かぶ竹田城址が朝日に輝く絶景を見ることができますが、利神城址の場合、残念ながら東に適当なビュースポットが見当たりません。加えて、竹田城址は石垣がそれなりに残っていて遠目にも城跡らしさがありますが、利神城址は石垣はあるもののかなり崩れていて人が近づくには石垣を積み直す必要がありそうです。

ただ、旧因幡街道沿いには古い町並みも残っているので、地域の歴史的財産である城跡を整備して、何とか地域の活性化に繋がってくれれば、と思います。

写真-3 利神城址（『利神城と平福のまちなみ』から引用）

写真-4 立雲峡から見た竹田城址

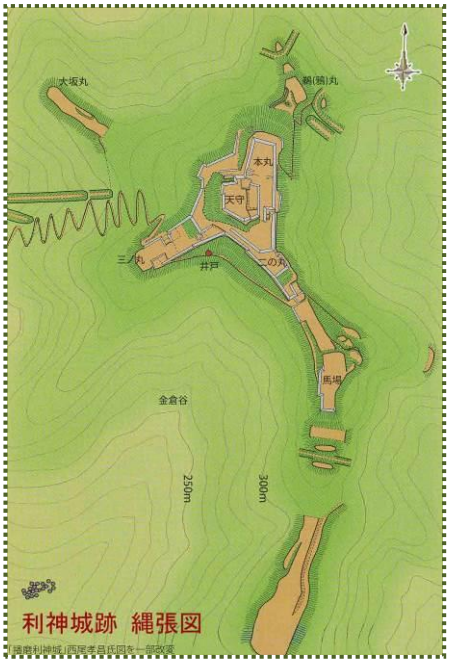

図-2 利神城跡 縄張り配置図
（「時を越え戦国の地へ～官兵衛ゆかりの佐用「三城」を巡る」ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄから引用）

表-1 利神城址と竹田城址の比較表

	利神城址	竹田城址
築　城　年	貞和５年（1349）	嘉吉３年（1443）
築　城　主	別所敦範	山名宗全
改　築　年	慶長 10 年（1605）	―
改 築 城 主	池田出羽守由之	―
廃　城　年	寛永８年（1631）	慶長５年（1600）
別　　称	雲突城（くもつきじょう）	虎臥城（とらふすじょう）
山名・標高	利神山　373.3m	虎臥山　353.7m
縄張りの種類	連郭式山城	梯郭式山城
規　　模	東西約 200m、南北約 400m	東西約 100m、南北約 400m

※ **縄張り**：曲輪（くるわ）や堀、門、虎口（こぐち）等の配置をいう。城の最重要項目といってよく、城の良し悪しはこれで決まるとも言える。曲輪の配置によって大きく分類できるが、実際はその地形的条件や城の規模により、いくつかの形が混在する。

※連郭式山城：本丸を中心として直線上に曲輪を配置する縄張り。山の尾根等横に曲輪が配置できない場合に多く用いられる。

※梯郭式山城：本丸の虎口に二の丸、二の丸の虎口に三の丸というように、馬出（うまだし）状に曲輪を連ねることで防御性を高めた縄張。比較的よくみられる縄張り。

■ 荒廃が進む利神城址

城跡を歩きまわると草に埋もれた瓦の破片がたくさん見つかります。これが“天守破却”の残骸なのかも。

天守や本丸、二の丸、三の丸等の石垣は、土壌浸食や木の根の成長などが原因で、緩んだり崩落したりしてかなり荒廃が進んでいます。このまま放置すると風雨等による浸食がさらに進みます。何とかならないものでしょうか。

写真-5 山頂の利神城址の石垣

写真-6 天守跡

写真-7 本丸北から天守台を撮影

写真-8 本丸南から天守台の石垣を撮影

写真-9 本丸から三の丸を撮影

写真-10 崩落した天守台下部の石積

写真-11 三の丸から天守台を撮影

■ 今も石塁が残る御殿屋敷跡

平福は、由之が慶長 12（1607）年備前下津井転封（てんぽう）となり、その後城主は、輝政の末弟・長政、奥さんの良正院尼公（徳川家康の二女・督姫）、六男の輝興（てるおき）と続き、寛永 8（1631）年輝興の赤穂転封により廃藩・廃城となります。江戸時代に書かれた地誌『播磨鑑（はりまかがみ）』には、「これより平福破城し、屋敷跡等悉（ことごと）く畠に成る」と記されています。草生（くさむ）した北石塁や南石塁、うわがみ門横の石塁が御殿屋敷の昔を今に伝えています。

智頭急行の平福駅から農道を北へ 100m ほど歩いていくと南石塁があります。石塁の山麓部は智頭線（現・智頭急行）建設時に取り壊されたとか。ここは、「くいちがい門」という御殿屋敷の大手門があったところで、内枡形虎口を形成していたそうです。「くいちがい門」から佐用川まで延びていた石塁はなくなり、今は田んぼです。そして、石塁に沿って南側に堀があったそうで、このたびの災害復旧助成工事に伴う埋蔵文化財調査の中でその存在が明らかになっています。堀幅は 13m あり、佐用川に並行した内側面にも石垣があったことから、川と遮断した上で堀に水を溜めて、佐用川、左支川の庵川とともに利神城の防御ラインを形成していたものと思われます。

農道をさらに 100m ほど行くと「うわがみ門」のあった所に到達します。農道によって石塁が分断されていますが西側に向いた枡形虎口で、ここから利神城へ登城するつづら折れの道に繋がっているそうです。

写真 12 北石塁を北の高台から望む

写真-13 南から見るうわがみ門周りの石塁

写真-14 南石塁を南から見る

写真-15 北石塁を南から見る

写真-16 南から見るうわがみ門周りの石塁

写真-17 南石塁を西から見る

現在も巨大な竪堀に沿って登城道がわずかに残っているとか。この「うわがみ門」を過ぎて、智頭急行の線路下をくぐった右手の果樹園（柿）と水田が城主常屋敷跡のようです。そしてその先が北石塁ですが、残念ながら草に覆われていてよくわかりませんでした。

図-3 御殿屋敷跡（平福城跡）縄張図（『播磨利神城』西尾孝昌氏原図一部改変）

（『利神城と平福のまちなみ』から引用・加工）

■ モノローグ

“天災は忘れた頃に来る” これは、物理学者・寺田寅彦が言い出したといわれる有名な警句ですが、平成 21（2009）年８月の兵庫県西・北部豪雨による災害から５年が経過し、千種川水系の中・上流で進められている復興事業も来年の増水期までには概成するところまで来ている中、前線の停滞に伴う８月 16 日からの大雨により、今度は兵庫県の東端にある丹波市において大きな災害が発生しました。特に旧市島町域にピンポイントで降った豪雨は、北岡本で最大 24 時間雨量 414mm（最大時間雨量 91mm）を記録、旧市島町域だけで土砂崩れが 123 ヶ所発生し、これによる家屋崩壊で１名が亡くなられました。住宅被害は全壊 16 戸、半壊 21 戸、床上浸水 113 戸、床下浸水 364 戸にのぼり、緊急輸送路にもなっている国道 175 号の八日市橋が落橋し通行不能になっています。筆者は、平成９（1997）、10（1998）年度の２年間、旧市島町にお世話になっていたこともあって現地の状況が気がかりです。

“災害は忘れなくてもやってくる” 一日も早い復興を！

【参考資料】

1 『佐用町史』上巻 佐用町 昭和 50 年 10 月
2 『改訂増補 佐用の史跡と伝説』 佐用郡歴史研究会 昭和 48 年６月
3 『利神城と平福の町なみ』 佐用町教育委員会 平成 25 年３月
4 『播磨国佐用郡平福 田住家文書翻刻資料集 第一集』佐用町 平成 16 年３月

写真-18 イワタバコの花（飛竜の滝にて）

※左の写真は、８月上旬に飛龍の滝近くで撮影したイワタバコの花です。水しぶきが当たるような岩場に群生し、８月頃に紫色の花を咲かせます。

※発刊：平成 26（2014）年９月 『ひょうご水百景』No.40
改訂：令和 ８（2026）年４月 『ひょうご水百景』No.40